

【研究論文】

謎解き読みによる「盆土産」(三浦哲郎)の作品解釈  
—家族の「きずな」「温もり」に代わるもうひとつの全体解釈—

梶原郁郎(山梨大学)

【はじめに】本稿の課題と方法

本稿は謎解き読みによる「盆土産」の作品解釈を通して、家族の「きずな」「温もり」という学習指導書の全体解釈を塗り替えて、もうひとつの全体解釈を提示する。

文学教育において作品全体の解釈(以下、全体解釈)が定番化している実情が近年指摘されてきている<sup>(1)</sup>。その実情を筆者は、現在五社全ての小学校国語教科書に掲載されて研究総数も相当数に登る「ごんぎつね」(新美南吉)を対象に調査した。その結果、読者論に立つ児童言語研究会(以下、児言研)と文芸教育研究協議会(以下、文芸研)、作品論に立つ教育科学研究会国語部会(以下、教科研)と科学的「読み」の授業研究会(以下、読み研)<sup>(2)</sup>、以上四団体いずれも、ごんと兵十の心の交流を全体解釈としていた。「たがいに殺し殺されるというかたちでしか心のかよいあえなかった痛ましい悲劇」という文芸研の西郷の全体解釈は、児言研・教科研・読み研でも共通であった<sup>(3)</sup>。この全体解釈は、全国国語教育実践研究会の「ごんぎつね」研究にも確認できるように<sup>(4)</sup>、文学教育で定番化している。このようにある特定の全体解釈が固定されていれば、作品各箇所解釈(以下、部分解釈)も全体解釈に規定されて固定化することになる。

この現状に対して筆者は、「ごんぎつね」の謎解き読みを通してもうひとつの全体解釈を提示した。ごんがうなぎを草の上に置く場面①最後の文章をめぐって、「ごんの人柄の良さ」「やさしさ」という解釈が広く見られる<sup>(5)</sup>。その文章には次の謎を見出せる。ごんが自宅の前に「太いうなぎ」を置いておく行為は、兵十に自宅を教える行為となり、全く危険ではないか<sup>(6)</sup>。この謎は、人間はごんらを撃つという事実をごんは知らなかったと解釈すれば、仮説的に解決できる。それがごんの認知状況であったとすれば、自宅前にうなぎを置く行為も理解できる。この仮説としての部分解釈を場面②以降の本文で検証して、「人間と動物との[撃つ—撃たれる]関係をまだ知らない、純粹無垢ないたずら好きなごん」という新たな全体解釈に筆者は到達した<sup>(7)</sup>。このようにもうひとつの全体解釈が発見されれば、場面②以降の従来の部分解釈も問い直さなければならないことになる。

このように通例化した全体解釈(以下、通例的テーマ)を塗り替えた後、筆者は「海の命」(立松和平)・「うさぎのさきばん」(キム・セシル)に続けて<sup>(8)</sup>、中学二年生の国語教材「盆土産<sup>(9)</sup>」に注目した。「盆土産」の全体解釈(主題)は、学習指導書によれば「まさに、家族一人一人の心を結び付けているきずなの深さとぬくもりにある」(下線は引用者、以下同)<sup>(10)</sup>。この主題の下、作品各箇所の「えびフライ」「えんぴフライ」の言葉は次の

ように解釈されている<sup>(11)</sup>。「たびたび現れる」それらの言葉には展開が進むにしたがって、互いに思い慕う心情が込められていく。そして「えびフライ」を通して、家族のきずなを無意識のうちに深く確かめ合っていくのである。

その全体解釈が通例化しているかどうかは、「盆土産」の解釈研究・実践研究は「ごんぎつね」の場合のように多くはないので、判断が難しいが、『中学校国語教材研究大事典』が提示する主題はその一定の普及状況を示すものであろう。そこでは喜作の「横縞の T シャツ」が「喜作ひとりの物」、「えびフライ」が「家族みんなで食べる物」と解釈されて、主想〔主題〕が「〈えびフライ〉の裏に「父と姉と祖母とみんなで支度をし、みんなで食べる楽しさ」が隠れていました」とされている<sup>(12)</sup>。このように学習指導書の主題は、「教材としての「盆土産」は、父の土産であるえびフライをめぐる展開する家族の温かい交流を描いた物語として読まれることが多い」と黒田・幾多が指摘するように<sup>(13)</sup>、現場に普及していると見ることができる。

この点を検証するために「盆土産」の実践報告を見てみよう。唐沢は「登場人物それぞれの「えびフライ」に込めた思いは何かを軸に読んでいくこと」で、「家族の絆」を「作品の基本構造」として、「えんぴフライ」を「父の苦労や愛情が伴った」土産であるとしている<sup>(14)</sup>。同様に加藤も「家族の絆」を主題として、実践報告の中で次のように述べている<sup>(15)</sup>。「「えびフライ」「えんぴフライ」という言葉には、展開が進むにしたがって、家族を慕う心情が込められていく。そして「えびフライ」を通して、家族の絆を無意識のうちに深く確かめ合っていくのである。ここに描かれている家族一人一人の心を〔の〕結び付きの深さや温もりをじっくり読み取っていきたい」。

このように文学教育において学習指導書の主題「家族のきずな」「温もり」が普及している中、「盆土産」の語り手を少年（小学三年）ではなく、大人になった少年と設定し直すところから、新たな「解釈」が提案されている<sup>(16)</sup>。それは、大人になった少年が小学三年時の盆土産の思い出を振り返って書かれたものとして「盆土産」を読む方法である。それによって加藤は、「父親が東京での仕事をやめて家族のもとに戻ってくる、そのような日は来なかったであろう」という「家族崩壊の予兆」を「盆土産」の全体解釈として、通例化しつつある上述の主題である「小三に息子の目に映るほのぼのとした家族の温かい姿」を、語り手を小三の息子と見た場合の全体解釈として整理している<sup>(17)</sup>。前者の全体解釈を実践に持ち込むことを加藤は、それが本文の文章・言葉に手がかりを求められないからであろう、留保している<sup>(18)</sup>。

この点を踏まえて本稿は語り手を小三の少年に据え置いた上で、通例化しつつある全体解釈（主題）「家族のきずな」「温もり」に代わる新たな作品読解に取り組んだ。従来の「盆土産」研究における作品最終場面の定番化しつつある部分解釈が他の本文箇所と不整合をきたしていることを突き止めて、その謎を思考の対象として解決を図るとき、どのような新たな全体解釈が俄かに見えてくるのか。その謎（不整合）を繙くことができれば、従来の解釈と本稿の解釈双方の妥当性の高低も児童生徒に判断を委ねることができる。

### 【1】「盆土産」の最終局面の解釈状況—文章㊦の「うっかり」をめぐって—

本章では、これまでの「盆土産」の解釈研究・実践研究において最終局面の文章㊦はどのように解釈されてきているのか、「うっかり」の言葉に焦点を当てて考察する。これは、全体解釈「家族のきずな」「温もり」が通例化しつつある中、そして一部で全体解釈「家族崩壊の予兆」が提示されている中、文章㊦の部分解釈を問う作業である。

最終場面の本文を、文章番号を挿入してまず引用してみよう<sup>(19)</sup>。

㊦	バスが来ると、父親は右手でこちらの頭をわしずかみにして、「んだら、ちゃんと留守してきな。」と揺さぶった。
㊧	それが、いつもより少し手荒くて、それで頭が混乱した。
㊨	んだら、さいなら、と言うつもりで、うっかり、「えんぴフライ。」と言ってしまった。
㊩	バスの乗口の方へ歩きかけていた父親は、ちょっと驚いたように立ち止まって、苦笑いした。
㊪	「わかってらぁに。また買ってくるすけ……。」
㊫	父親はまだ何か言いたげだったが、男車掌が降りてきて道端に痰をはいてから、「はい、お早かう。」と言った。父親は、何も言わずに、[……] バスの中へ駆け込んでいった。
㊬	「はい、発車あ。」と、野太い声で車掌が言った。

文章㊧㊨は学習指導書によれば、「頭を荒々しく揺さぶられたために、頭の中が混乱して、それでうっかり「えんぴフライ」なんておかしなことを口走ってしまったのだと、言い訳をしている。しかし、この語り手の少年の混乱は、こらえがたい別れの思いを無理にもこらえようとする自分自身の気持ちからの混乱であろう」<sup>(20)</sup>。文章㊨の少年の「えんぴフライ」は「こらえがたい別れの思い」からの「おかしな」発言とされている。その「思い」に、文章㊦の部分解釈と全体解釈（家族のきずな）との規定関係が表れている。

では、文章㊦の「盆土産」研究における解釈をまず丸山に見てみよう。「読者は、少年の目線に従って、えんぴフライを核にした二日間の父親と家族の温かい交流を読みとっていくしかない」と語り手と主題を明示した上で、丸山は自らの解釈を述べている<sup>(21)</sup>。「「うっかり」発した言葉だから、ここでは「えんぴフライ」と正確には発音できなかった。自慢げな隣の喜作と張り合って、「えんぴフライ」と言った時とは違って動揺している」という指摘の後、文章㊦の「うっかり、「えんぴフライ。」と言ってしまった」という箇所解釈が次のように列挙されている<sup>(22)</sup>。①「えんぴフライをまた土産に買って来てほしい」、②おいしかった土産に「ありがとうという感謝の気持ち」、③二日間の帰省でも「ありがとうという感謝の気持ち」、④「また、帰って来てほしい」と「父親の愛情を求めている」。以上丸山は解釈①を「表の意味」、解釈②③④を裏の読みとしているが、いずれも全体解釈（家族のきずな）との関係性を見てとることができる。

次に野中は加藤（2006）同様に、大人になった少年を語り手と見て、「推測の域を出な

い」と断りながら、最終場面に顕在化した親子の「絶望的なすれ違い」が死別によってかなわないものとなったという「未完了のつとめ」を最終的な作品解釈としている<sup>(23)</sup>。加藤の「家族崩壊の予兆」という悲観的な主題に近い全体解釈の下、野中は文章⑨を「駄々をこねている幼児と同じように、自分でもなぜ「えびフライ」と言ってしまったのか、よくわかっていない」として、さらに次の解釈を提示している<sup>(24)</sup>。①えびフライを持っての父親の帰省は、死者に会うためであったという気付きや、②そういう気付きの向こう側に父親の喪失感を少年は感受している、③死者のことを忘れてえびフライを食べてしまったことに対するうしろめたさのような心理であった。野中の全体解釈は、次章で取り上げる文章⑩に直結するが、文章⑨をめぐっては以上を部分解釈としている。

最後に黒田・幾多は語り手を大人になった少年あるいは少女と見て、加藤同様に「崩壊する未来」を全体解釈とする中、「父をバス停まで送る道すがら、主人公はえびフライを話題にしなかった」文章④までの時間帯に次のように注目している<sup>(25)</sup>。「ドライアイスもいらねばな」という言葉が口に出るのだから、このときの主人公はえびフライのことが心にあったはずである。最後に「えんぴフライ」と「うっかり」「言ってしまった」という表現からも、主人公がえびフライのことを気にかけていたことが窺えるだろう。それなのに、なぜ主人公はえびフライの話題に触れようとしなかったのか。この疑問に黒田・幾多はまず、「土産をねだるのが恥ずかしかった」「えびフライが滅多に手に入らない高価なものなので言い出しにくかった」「父との別れの悲しさの方が強くえびフライのことを言う気になれなかった」という解釈を示している<sup>(26)</sup>。

さらに黒田・幾多は、野中の上述の解釈①②③に一定の同意を示した上で、文章⑨の解釈を次のように提示している<sup>(27)</sup>。

主人公がえびフライに対してうしろめたさや葛藤を感じていることを、父親は知らない。えびフライを買ってきてほしいのにそう言わない子供に対して親が感じるのは、家族や自分に対するその子の気遣いや優しさではないか。だから、父親は次もえびフライを買ってきてあげたいと思うのだろうが、主人公はそれを全面的には望んでいない。この時すでに父親と主人公の思いはすれ違っているのだ。結末の「えんぴフライ」をめぐりやりとりは、そうしたすれ違いが顕在化したものである。

このように黒田・幾多は文章⑨については、主人公は「えびフライのことを気にかけていた」が「全面的には望んでいない」と解釈して、読みの焦点を、文章④まで主人公の姿（ドライアイスの言葉を口にしながら、えびフライを買ってきてほしいと直接言わない姿）に当てている。その姿を黒田・幾多は主人公の「うしろめたさ」「葛藤」と読むと同時に、その姿に父親は「気遣い」「優しさ」を感じていると解釈している。こうした読みがなされながら、最終局面には父親と主人公の思いの「すれ違い」が顕在化しているというように、主題（家族のきずな）とは対照的に悲観的な解釈が提示されている<sup>(28)</sup>。

以上のように文章⑨をめぐって、(1)丸山は「うっかり」の意味よりも「えんぴフライ」に込められた少年の気持ちを問題にして、その心情を「感謝」「愛情」の要求と解釈している。(2)野中は文章⑨の少年を「駄々をこねている幼児と同じ」として、その心情については死者への「うしろめたさ」等の解釈①②③を提示している。(3)黒田・幾多は、文章⑨よりも、文章④までに主人公が「えびフライを話題にしなかった」ことの方をとり上げて、その姿を父親への「気遣い」「優しさ」と解釈している。これらの論者は、自らの文章⑨の解釈を踏まえて直後の文章⑤をどのように解釈しているのでしょうか。この点を次章では、両者の新たな解釈を本稿第三章で提示することを予定して、考察する。

## 【Ⅱ】作品最終局面の解釈状況－文章⑤「ちょっと驚いた」「苦笑い」をめぐって－

本章では、これまでの「盆土産」の解釈研究・実践研究で最終局面の文章⑤はどのように解釈されてきているのか、「ちょっと驚いた」「苦笑い」の言葉に焦点を当てて考察する。

文章⑤は文章⑨の直後の文章であるので、文章⑨を解釈したのであれば文章⑤も解釈されてよいはずである、むしろ文章⑨の解釈は文章⑤をどう規定するのかという観点から、文章⑨の解釈は文章⑤の解釈と併せて吟味し直されてよいはずである。一層具体的には、文章⑨にある解釈を与えたら、文章⑤をめぐって父親は“何に”「ちょっと驚いた」のか、父親の「苦笑い」は“どのような意味なのか”という点が、文章⑨との関係において問われてよいはずである。文章⑤に関して学習指導書は、祖母がえびフライの尻尾まで食べてむせたことに父親が「苦笑い」したとき同様に「苦々しさ」を重く感じ取らない方がよい」と述べるに留まっている<sup>(29)</sup>。この文章⑤は丸山も黒田・幾多も解釈の対象としておらず、野中は文章⑤の「苦笑い」の意味については問うている。

この点を、野中の文章⑨をめぐる上述の解釈①②③を確認して、見てみよう。まず野中は、文章⑨の「えんぴフライ」の言葉の背後にある少年の次の気持ちを、教室で共有することはそれほど難しくないだろうと前置きして、指摘している<sup>(30)</sup>。⑦「母ちゃんにも食べさせたかったね」、えんぴフライ「ありがとう」、また「食べたいな」等を言いたかった、⑧「いっしょに東京に行きたい」「行っちゃいやだ」「父っちゃんが好きだ」等を伝えたかった。この指摘の後、文章⑤の父親の「苦笑い」が次のように解釈されている<sup>(31)</sup>。

万感の思いがこもった「えんぴフライ」という発話を父親は、「えびフライをまた買ってきてほしい」という意味で受け止め、苦笑いしながら「わかってらぁに」と答えてしまうのである。息子にとっては父親の存在よりもえびフライの方が重要で、「いっしょに東京に行きたい」とか「行っちゃいやだ」とかではなく「えびフライをまた買ってきてほしい」と言われてしまったと了解したわけだ。しかしこれはもちろん完全な誤解である。

野中は父親の「苦笑い」を、「えびフライをまた買ってきてほしい」という意味で受け止めたことによる「苦笑い」と解釈している。父親よりもえびフライへの思いの方が強い

と父親が文章㊦を受け止めたと解釈すれば、「苦笑い」は主に寂しさ・悲しさを含んだものとなる。この意味の寂しさ・悲しさが、別れに当然伴うそれに加わることになる。

次に昌子の解釈を見てみよう。本作品の語り手を大人になった少年と設定して、昌子は文章㊦の「苦笑い」を次のように解釈している。この中の「決意」とは、この盆を最後に故郷に帰らないと父親が決意していたという、黒田・幾多による上述の主題「崩壊する未来」に向かう昌子の想像である<sup>(32)</sup>。

別れに際し頭をわしずかみにして揺さぶる、というのはこの父子に恒例のことであった。しかし、この行為はこの年、「いつもより手荒」かったという感想を語り手はもっている。それがなぜだったか。そして、混乱したそのときの語り手の口から出た「えんぴフライ」という言葉に苦笑いを浮かべる父親。父親の側では「……はうまかった。また食べたい。買ってきて。」を補ってその言葉を受け取るようになったのだろうが、それを了解することは、ある「決意」を胸に秘めている父親には、つらい。それがあの「苦笑い」だったのだと「今」の語り手は理解している<sup>(33)</sup>。

ここに昌子は父親の「苦笑い」を、別れの場面における「えんぴフライ」という言葉への「苦笑い」と解釈して、それには「決意」が含まれていると読んでいる。

最後に、「家族のきずな」を全体解釈とする学習指導書による「苦笑い」の解釈を見てみよう。同書は文章㊦㊦を「悲しさや寂しさを感じる」と解釈しているが<sup>(34)</sup>、文章㊦は別れの場面であるので、父親の「苦笑い」に悲しさ・寂しさが含まれていることは当然であろう。ここで、学習指導書が文章㊦を「おかしなことを口走ってしまった」と読んでいたことを踏まえれば<sup>(35)</sup>、文章㊦の「苦笑い」は「おかしさ」を主に含んでいるという解釈になる。それは、「やっぱりお前、えびフライのこと言ったな」と言いたげな父親の様子で、高木の実践報告の中で「悲しくてユーモアのある切ない別れ」「別れの言葉が「えんぴフライ」というのが、面白い」という生徒の発言として見られる<sup>(36)</sup>。

以上の文章㊦の「苦笑い」は、別れの場面に付帯する悲しさ・寂しさを主に含むという常識的な解釈の外に、次のように解釈されている。(1) 野中によれば「苦笑い」は、父親よりもえびフライへの思いの方が強いと父親が文章㊦を受け止めたことによる寂しさ・悲しさを含んでいる。(2) 学習指導書および高木によれば、「苦笑い」にはおかしさ(ユーモア)が含まれている。昌子は、苦笑いの対象は「えんぴフライ」という言葉であると読んでいたので、「苦笑い」の解釈は(2)に近いと見ることができる。

このような文章㊦の解釈状況を前に筆者が留意したいのは、文章㊦の解釈との関係において父親は何に「ちょっと驚いた」のか問われていない点である。その点は、解釈(1)に基づけば、父親よりもえびフライへの思いの方が強いということに「驚いた」という読み、解釈(2)に基づけば、別れの場面にふさわしくない「えんぴフライ」の言葉に「驚いた」という読みにも自ずとなろう。これら以外に、「ちょっと驚いた」に関する新たな解

積はできないのであろうか。この点を課題に含めて次章では、「盆土産」の謎解き読みについて報告する。以上の解釈は、別れの場面は悲しい・切ないという常識を持ち込んだものだが、この常識を意図的に一旦括弧に括る思考が、もうひとつの新たな解釈を探っていく上で、まずは必要であろう。この思考の下、次章の作業は進められている。

### 【Ⅲ】謎解き読みによる「盆土産」の全体解釈—文章㉔㉕をめぐる謎とその解決—

本章では文章㉔㉕をめぐる謎の解決を通して、どのような新たな部分解釈と全体解釈が俄かに見えてくるのか報告する。この謎解き読みは、後述の理由に基づいて語り手を、学習指導書同様に、大人になった少年ではなく少年に設定して行われている。その作業によるもうひとつの解釈の発見によって、家族の「きずな」「温もり」という学習指導書の通例化しつつある解釈はひとつの解釈に位置づけなおされることになる<sup>(37)</sup>。

#### 1. 文章㉔㉕をめぐる謎とその解決

【文章㉔で父親は何に「驚いた」のか】という【疑問】を読み流さず、思考の対象としておき、次の場面に眼を向けてみよう。これは文章㉔の直前の場面である<sup>(38)</sup>。

①	村外れのつり橋を渡り終えると、父親はとって付けたように、「こんだ正月に帰るすけ、もつとゆっくり。」と言った。
②	すると、なぜだが不意にしゃくり上げそうになって、とっさに、「冬だら、ドライアイスもいらねべな。」と言った。
③	「いや。そうでもなかべおん。」と、父親は首を横に振りながら言った。「冬は汽車のスチームがききすぎて、汗こ出るくらい暑いすけ。ドライアイスだら、夏どこでなくいるべおん。」
④	それからまた、停留所まで黙って歩いた。

文章㉔で父親が「えんぴフライ」の言葉に驚いたのであれば、ドライアイスの言葉は実質的にえんぴフライを意味するので、文章②の時点で父親は驚いていたはずである<sup>(39)</sup>。しかしそこでは父親は驚かず、すぐに文章③の反応をして、冬でもドライアイスは必要であると説明している。文章③は、別れの場面であるから悲しさ・寂しさはあっても、何の驚きもなく普通に返事をしているように記述されている。このように文章②③を考察すれば、文章㉔で父親が驚いたのは「えんぴフライ」の言葉に対してではないということになる。ここに上述の【疑問】は、文章②では父親はドライアイスの言葉に驚いていないのに、文章㉔では父親はどうして「えんぴフライ」の言葉に驚いたのかという【謎】となってくる。

この【謎】は繙くことができるのであろうか。父親は「えんぴフライ」の言葉にではなく、「うっかり、「えんぴフライ。」と言ってしまった」息子の姿に「ちょっと驚いた」と文章㉔は読むことができる。「うっかり」をめぐる野中は、「駄々をこねている幼児と同じように、自分でもなぜ「えんぴフライ」と言ってしまったのかよくわかっていない」と解

積していたが、父親が「ちょっと驚いた」理由を捉えるためには、「うっかり」発言をした少年の内面のみならず、その発言の父親にとっての意味に注目しなければならない。ここに次の【解釈】を発見すれば、【謎】を解くことができる。

【解釈】：父親は、わが子がわずかながらも成長していた姿を、最後の別れの場面で一瞬垣間見て、その姿に「ちょっと驚いた」。

これは、少年が「うっかり」「えんぴフライ」と言えるまでに成長していた、すなわち、えんぴフライを次回もお願いしてはいけないと認知できるまでに成長していたと、文章⑨を読む解釈である。次回も本当はお願いしたいのだが遠慮しなければならないと思えるようになっていたからこそ、少年は「うっかり」「言ってしまった」となるわけである。えんぴフライは、食卓にて「自分のだけ先になくならないように」という最初の注意も忘れてしまうほどのおいしさであった。そのえんぴフライを少年は、次回のお土産として直接お願いすることに心的機制をかけることができない段階であれば、「うっかり」ではなく直接「えんぴフライ」と言っていたはずである。ここに少年の成長を見出すとき、本作品の題目が「盆土産」である次の理由が新たに浮かび上がってくる。えんぴフライは父親に帰省の度にお願ひできるものではなく、帰省の度を買ってきてくれるものではなく、盆だからこそこの土産である、このことを少年はわかるまでに成長していた、したがって題目は「盆土産」となっている。その認知ができる段階にまだ少年がなければ、えんぴフライは少年にとって「盆土産」ではなく、父親の帰省土産となる。

その【解釈】の妥当性は、文章⑨とその書替文とを対比させれば、さらに得られる。

- ・文章⑨：さいなら、と言うつもりで、うっかり、「えんぴフライ」と言ってしまった。
- ・書替文：さいならの代わりに、「えんぴフライ」と言った。

書替文には、次回もえんぴフライをお願いするのは遠慮しなければならないという少年の心情は表現されない。文章⑨の本稿の【解釈】は、「うっかり」を「言い訳」としていた学習指導書の解釈とも「盆土産」研究における解釈とも質的に異なるものである。

その【解釈】を前に、少年がドライアイス（文章②）と「えんぴフライ」（文章⑨）とをそれぞれ発したときの状況を注視してみよう。文章②では、「こんだ正月に帰るすけ、もっとゆっくり」という父親の言葉に、少年は「すると、なぜだが不意にしゃくり上げそうになって」いる。他方、文章⑨では、父親が少年の頭を「揺さぶった」行為（文章⑦）によって、少年は「頭が混乱した」（文章⑩）。このようにドライアイスと「えんぴフライ」それぞれを発したとき少年は“同じく”混乱しており、発話時の少年の状況が揃えられている。この本文の構成に私たちが気づいた上で【解釈】を踏まえれば、次の読みが可能となってくる。文章②のときに混乱してしまったからこそ、少年はドライアイスと言ってし



まったのであり、逆に混乱していなければドライアイスの言葉もえびフライの言葉も言うのを控えることができているであろう。他方、文章④のときには同様に混乱しながらも、少年は父親への遠慮の気持ちを表出できた。このように文章④と文章②とを併せて熟考することで、本文が精密な日本語の構造として俄かに見えてくる。

## 2. 謎の解決案としての【解釈】の検証—本文全体によるその検証作業—

前節の【解釈】は、文章①以前の本文において父親が帰省中に息子の成長を垣間見た場面が描写されていれば、成立しない。したがって【解釈】成立の可否は、【本作品全体を通して、父親が少年の成長を見た描写は文章④の別れの最後の場面だけで、その他にはない】という点の検証を待たなければならない。

そこで、父親が帰省して少年と最初に接した場面以降（96頁7行目以降）に再度注目して、まず、少年がえびフライを父親から受け取ったその場面を見てみよう<sup>(40)</sup>。「土間の上がり框で、土産の紙袋の口を開けてみて、まず、盛んに湯気を噴き上げる氷にびっくりさせられた」から「父親が珍しくそんな冗談を言うので、思わず首をすくめて笑ってしまった」までの間に、少年が遠慮気味で控え目な気持ちでえびフライを前にしている様子が描写されているであろうか。父親が「ドライアイスビニール袋にどっさりもらって、道中それを小出しにしながら来たのだ」と話した後、少年も「一晩中、眠りを寸断して冷やし続けながら帰ってきた」ことを知った。この事実少年は、そんなにまでして買って持ち帰ってくれた父親に対して若干の遠慮でも示す反応を見せていない。「一晩中、[……] 帰ってきたのだ」という文章の直後、少年は、父親が帰ってくるまでのえびフライに対する思い同様に、ここでもまた「それにしても、箱の中のえびの大きさには、姉と二人で目をみはった」というように、えびフライに夢中になっている。

次に、少年が家族でえびフライを食べる場面を見てみよう<sup>(41)</sup>。ここでも少年がえびフライに夢中になっていることがわかるように作品は作られているのであろうか。(1)「お前と姉は二匹ずつ食べ」という父親の言葉を、父親に二匹目をすすめることもなく、そのまま受け入れている。(2)「かむと、緻密な肉の中で前歯がかすかにきしむような、いい歯応えで、この辺りでくるみ味といっているえもいわれないうまさが口の中に広がった」、ここから少年がいかにかえびフライに集中しているかがわかる。(3)「最初は、自分のだけ先になくならないように、横目で姉を見ながら調子を合わせて食っていたが、二尾目となると、それも忘れてしまった」の場面では、注意していたことを忘れてしまうほど、少年がえびフライに夢中になっていた様子が描かれている。

最後に、えびフライを食べた翌朝の墓参りの場面を見てみよう<sup>(42)</sup>。「翌朝、目を覚ましたときも、まだ舌の根にゆうべのうまさが残っていた」という文章からはじまっているように、この場面でも少年はえびフライのうまさに注意が行っている。しかしこの場面では、少年におけるえびフライのうまさばかりが書かれているわけではない。「まだ田畑を作っている頃に早死にした母親は、あんなにうまいものは一度も食わずに死んだのではな

かろうかーそんなことを考えているうちに、なんとなく墓を上目でしか見られなくなった」、このようにこの場面の少年は、えびフライのうまさばかりを気にする姿ではない。そこには「上目でしか見られなくなった」とあるように、母親にもえびフライを食べさせたかったという思い、自分は食べることができたという「引け目」を感じている姿が描かれている。文章⑦でえびフライを父親に要求できないことを認知できるようになっていたように、墓参りの場面でも、少年の成長を読み取れる様子が描かれている。

この描写を上述の【解釈】の下で読む場合、【少年が成長していた姿は文章⑦以前に書かれているか】ではなく、【少年が成長していた姿を父親が見ている様子は文章⑦以前に書かれているか】という点が争点となる。少年が祖母と墓の前にいるとき、父親はそこにいっしょにいたであろうか。そのとき父親は「少し離れた崖っぷちに腰を下ろして、黙ってたばこをふかしていた」のである。このように父親は少年のそばではなく、少年から「少し離れた」ところにおり、しかも少年の方を見ているような様子もなく（その様子を暗示記述もなく）、「黙ってたばこをふかしていた」。以上のように文章①以降の本文を検証することで、父親は本作品で少年の成長を見たのは文章⑦のときがはじめてである点が明らかとなり、その結果【解釈】の妥当性が証左される。

以上の「盆土産」の謎解き読みは、文章⑦⑧や「少し離れた崖っぷち」等の部分解釈を新たな解釈に塗り替えてくれる。これによって、学習指導書が掲げる主題「家族のきずな」「温もり」とも、近年の論者が提示する主題「崩壊する未来」とも異なる、次のもうひとつの新たな全体解釈に到達できる。

**【新たな全体解釈】**：「盆土産」は、わが子がわずかながらも【成長】していた姿を、最後の別れの場面で一瞬見ることができた父親の【喜び】を描いた作品である。

こうして文章⑧で父親は何に驚いたのかという問題は、「うっかり」言えるまでに成長していた少年に「ちょっと驚いた」ということになる。また文章⑧の父親の「苦笑い」には【喜び】が含まれているということになる。これは従来に代わる新たな部分解釈である。

以上のように【疑問】を【謎】として正面から熟考する謎解き読みを通して、従来の「盆土産」研究に代わるもうひとつの新たな全体解釈と部分解釈に到達する。これは一読・二読程度で「到達」する解釈ではなく<sup>(43)</sup>、作品に謎を見出して謎を仮説的に解き、さらにその仮説を本文に即して検証する作業によって、確かな風景となって俄かに現われてくる、そういうレベルの解釈である。この謎解き読みの過程で読者は、新たな全体解釈が本文に即して証明できるように本作品の記述が精巧に作られていること、すなわち本作品が精密な日本語の構造となっていることを経験できる。

#### **【おわりに】 本稿の総括ー主題「崩壊する未来」と本文との関係を問題とするー**

以上本稿は、謎解き読みによる「盆土産」の作品解釈を通して、家族の「きずな」「温

もり」という全体解釈に代わるもうひとつの全体解釈を提示してきた。文章④で父親が、別れの場面にふさわしくない「えびフライ」の言葉に「ちょっと驚いた」という解釈の場合、文章②の時点で父親は、ドライアイスの言葉は実質的にえびフライを意味しているので、驚いていてよいはずである。前者の解釈と後者の文章②との不整合であるこの点に本稿は【謎】を見出して、次のように解いてきた。文章④は、小学三年生という年齢を踏まえても、少年が「うっかり」「えんぴフライ」と言えるまでに成長していたと読むことができる。これは、文章④を「駄々をこねている幼児と同じ」と見る解釈（野田）とも、文章④の「うっかり」を「正確には発音できなかった」と見る解釈（丸山）とも、「えびフライのことを気にかけていた」と見る解釈（黒田・幾多）とも異なる解釈である。この新たな解釈に気づけば、それに有機的に連動するかたちで、文章④の父親の驚きの対象も少年の成長となる。この解釈は、文章④以前の本文において帰省中に父親が少年の成長を見た場面の描写はないということが検証されなければ、成立しない。この検証を終えて本稿は、通例化しつつある主題「家族のきずな」「温もり」に代わる、さらに主題「崩壊する未来」とも異なる、新たな全体解釈を提出してきた。

最後に、本稿の課題に関わって二点指摘しておきたい。第一は、加藤をはじめとする論者による主題「崩壊する未来」をめぐる問題である。これは、加藤がその主題を実践に持ち込むことを保留にしていたように、また野中が「推測の域を出ない」解釈と断っていたように、本文の文章・言葉に手がかりを求めて検証しようのない解釈である。少年と父親と別れた後にその家族がどうなったのか（幸不幸いずれに向かったのか）は、「盆土産」の本文に手がかりを求めることができないので、検証のしようがない。論者が本文から離れてその家族の未来を想像することは自由であるが、主題「崩壊する未来」を授業に持ち込むことは非常に難しい。したがってある解釈を授業に持ち込む場合、本文で検証可能な解釈と検証不可能な解釈とを区分しておくことが前提として必要となる。

第二は、通例化しつつある主題「家族のきずな」「温もり」をめぐる問題である。それは、教師の援助（発問）がなくても初読で「到達」できるレベルの全体解釈ではないかという問題で、これは主題の定番化問題と併せて文学教育研究の課題として近年指摘されてきている<sup>(44)</sup>。帰省した父親を囲んで家族でえびフライの食卓をともにする風景が詳らかに描写されているので、また最後では、泣きそうになる少年と父親との別れが丁寧に描かれているので、一読すれば多くの読者が、本作品は「家族のきずな」「温もり」を描いたものと読むであろう。その場合、学習指導書も掲げるその主題は、それに生徒は授業前に「到達」していると想定されるので、授業で取り上げる必要が問われることになる。

これに関して、高校生 20 名を対象とした筆者による「盆土産」の授業（2019 年 12 月 10 日）の結果を引いてみよう。生徒が二読後の授業前の事前質問紙で、20 名中 18 名が主題「家族のきずな」「温もり」に「そう思う」と「おおよそそう思う」いずれかを回答した。20 中 2 名は「あまりそう思わない」と回答して、自らの解釈を記述する欄に、本稿の全体解釈は書かれていなかった。さらに事後質問では 20 名全てが、新たな全体解釈

は「一読・二読ではわからない主題」と回答した<sup>(45)</sup>。この結果が証左するように、本稿の新たな全体解釈とは対照的に、主題「家族のきずな」「温もり」は初読か二読で「到達」可能な解釈である。教師による発問を必要とする点で、謎解き読みによる全体解釈は従来のそれと質的に異なるもので、教師の学力（専門的力量）が問われることになる<sup>(46)</sup>。

### 【註】

- (1) 作間慎一『文学作品の謎解き授業』玉川大学教職センター、2008年、拙稿「読者論に立つ授業「ごんぎつね」における読みの「多様性」－教師の【通例的主题】による児童の解釈の水路づけ－」『山梨大学教育学部紀要』第27号、2018a年、167-181頁、拙稿「文芸教育研究協議会の授業「海の命」における本文解釈の構造的問題－印象が解釈路線を決定する読みの心理－」同『紀要』第27号、2018b年、183-198頁。
- (2) 足立悦男「主題」大槻和夫（編）『国語科重要用語300の基礎知識』明治図書、2005年、157頁。主題（全体解釈）をめぐる作者説（作品の主題を作者の意図と見る立場）が現在後退している中、読者論が「読み手である読者が作り出す」とするのに対して、作品論は「文学作品の中に客観的に存在する」としている（同上、157頁）。
- (3) 前掲拙稿（2018a）、167-168頁。
- (4) 全国国語教育実践研究会（編）『実践国語研究』第139号、1994年、46頁。
- (5) 西郷竹彦『小学校中学年・国語の授業』明治図書、2005年、113頁、川野理夫『教師の読み・ごんぎつね』あゆみ出版、1986年、1-2頁、大西忠治（編）小林信次・加藤辰雄・加藤元康（著）『「ごんぎつね」の読み方指導』明治図書、1991年、32頁、全国国語教育実践研究会（編）、前掲、17頁。
- (6) 拙稿「「ごんぎつね」の謎解き読みの提案－作間提案の「いたずら」解釈の修正を踏まえて－」極地方式研究会『デポ』第159号、2018c年、77-78頁。
- (7) 同上、78-86頁。この全体解釈に立てば部分解釈も、従来のそれに代わる解釈が可能となってくる。村人に撃たれる危険性をごんが認知していたのであれば、例えば場面②でごんは「いつのまにか」「兵十のうちの前に」くることも（新美南吉「ごんぎつね」『国語（4下）はばたき』光村図書、2016年、14頁）、場面④で村に「ぶらぶら遊びにでかけ」ることも（同上、19頁）しないはずである。
- (8) 前掲拙稿（2018b）、拙稿「「うさぎのさいばん」における児童の解釈の変容過程－主題「恩」を塗り替えるもうひとつの全体解釈－」『教授学習心理学研究』第16巻第1号、2020年、32-49頁。
- (9) 三浦哲郎「盆土産」『国語2』光村図書、2016年、92-103頁。
- (10) 「きずなを読む」『中学校国語・学習指導書2上』光村図書、2012年、293頁。
- (11) 同上、293頁。
- (12) 小高進「指導案「盆土産」」国語教育研究所（編）『中学校国語教材研究大事典』明治図書、1993年、798-800頁。

- (13) 黒田俊太郎・幾田伸司「「盆土産」(三浦哲郎)教材研究のための覚え書き」『語文と教育』第32号、2018年、12頁。
- (14) 唐澤豊「読み方を学びながら楽しく読むー「盆土産」(中学二年)ー」『月刊国語教育』第335号、2008年、13-14頁。
- (15) 加藤千鶴「「書くこと」の指導実践ー「盆土産」(中学校二年)からー」『富山大学国語教育』第36号、2011年、29頁。
- (16) 加藤郁夫「「盆土産」(三浦哲郎)を読むー二層に重なる物語ー」『月刊国語教育』第312号、2006年、64-65頁、野中潤「教材としての「盆土産」(三浦哲郎)」『国文学論考』第53号、2017年、81-82頁。語り手を「小三の息子/大人になった息子」と見る加藤の見解(加藤、前掲、29頁)を引いた後、黒田・幾多は、語り手を「小三の娘/大人になった娘」と見る見解を提示している(黒田・幾多、前掲、13-14頁)。
- (17) 加藤(2006)、前掲、65頁。
- (18) 同上、65頁。この解釈は和田によって、三浦哲郎の三作品「ボールペン」「接吻」「盆土産」共通のものとして提示されている(和田悦子「三浦哲郎短編小説論ー出稼ぎものにおける崩壊の構図ー」『文月』第2巻、文月刊行会、1997年、61頁)。
- (19) 三浦、前掲、102-103頁。
- (20) 前掲学習指導書、302頁。
- (21) 丸山義昭「小説「盆土産」(三浦哲郎)」『(国語科授業の改革5)国語科小学校・中学校新教材の徹底研究と授業づくり』学文社、2005年、71、74頁。
- (22) 同上、74頁。
- (23) 野中、前掲、83頁。
- (24) 同上、79-80頁。
- (25) 黒田・幾田、前掲、14、17頁。
- (26) 同上、17頁。
- (27) 同上、18頁。
- (28) 同上、20頁。
- (29) 前掲学習指導書、302頁。
- (30) 野中、前掲、81頁。
- (31) 同上、81頁。
- (32) 昌子佳広「文学教材「盆土産」(三浦哲郎)の教材研究ー「語り」の問題とその教材性ー」『茨城大学教育学部紀要(教育科学)』第60号、2011年、17頁。
- (33) 同上、18頁。
- (34) 前掲学習指導書、319頁。
- (35) 前掲学習指導書、302頁。文章㊦の解釈は次の「生徒の発表例」として提示されている。少年は「うっかり「えんぴフライ」と言っていました。少し笑えるようだけど、父親が持って帰ってきてくれたお土産のえびフライがとても心に残っていたか

- らこんな言葉が出たんだと思うと、少し悲しい気持ちになりました」(同上、317頁)。
- (36) 高木雅子「文学的文章を批評する読みの学習ー表現者として読む授業の工夫・「盆土産」(光村二年)を中心にー」『国語国文研究と教育』第50号、2012年、11頁。  
この解釈に立っても、文章⑤の父親の「驚き」は、別れの悲しい場面の中にあっても「えんびフライ」の言葉に「驚いた」という解釈になろう。
- (37) この両解釈は並置されるものではなく、後述のように筆者が授業研究で検証したように、「きずな」「温もり」は一読で「到達」できるレベルの解釈である。この点も検証も、もうひとつの解釈の発見とそれによる授業研究によって可能となる。
- (38) 三浦、前掲、102頁。
- (39) 文章②の時点はまだ別れの直前ではなく、ドライアイスの言葉が「さいなら」の代わりに発せられたのではないにしても、この時点でその言葉を聞いていれば、文章⑦でえびフライの言葉を聞いても、父親は驚かないはずである。なぜならいよいよ別れとなる場面近くになっても少年の頭の中にえびフライがあることを、文章⑧のときの父親は、文章②のドライアイスの言葉によって十分に想定できるからである。
- (40) 同上、96頁7行目-98頁11行目。
- (41) 同上、99頁11行目-100頁18行目(最終行)。98頁12行目(午後遅く----)から99頁10行目(----通り過ぎた)までは少年と喜作(4年)との場面である。
- (42) 同上、101頁1行目-102頁3行目。その3行目後半が文章①である。
- (43) この点は、「盆土産」研究で文章⑤の父親の驚きが着眼されていなかったことから、後述の筆者による質問紙の結果からも指摘できる。
- (44) 作間慎一「文学教材の謎解き読みによる授業の提案ー「一つの花」(今西祐行)の謎解き読みの試みー」『玉川大学教育学部紀要』、2011年、3頁、前掲拙稿(2018a)、176-177頁、前掲拙稿(2018b)、195頁。
- (45) これは、本稿の新たな解釈が成立することを証左している。解釈研究の段階では、ある解釈の妥当性の十全さは、本稿のように著者の生涯等の情報を本文外部から持ちこまず進められた解釈であっても、主張できない。そして本稿は文学作品の中でも文学教育教材を取り上げた研究であるので、新たに提案する解釈は児童生徒に通用するものであるかどうかを授業研究として検証されなければならない。
- (46) この質的相違が確認されないとき、謎解き読みを通して俄かに見えてくるもうひとつの全体解釈Ⅱと従来の全体解釈Ⅰとは、読み取りの難易を踏まえず同列に扱われかねない。註(37)にも確認したこの点を指摘した上で(作間、前掲(2011)、3頁)、作間は謎解き読みを提案・実践してきている。